

マッギフィンとその時代
－新発見の上野彦馬の写真を手がかりに

McGiffin and The Age
- The Newly Discovered Photograph by Hikoma Ueno Provides a Vital Clue

2007年 9月

周 偉嘉 **WeiJia Zhou**

内藤 洋介 **Yosuke Naito**

マッギフィンとその時代
－新発見の上野彦馬の写真を手がかりに

McGiffin and The Age
- The Newly Discovered Photograph by Hikoma Ueno Provides a Vital Clue

周 偉嘉

WeiJia Zhou

内藤 洋介

Yosuke Naito

Abstract

A portrait photograph of McGiffin, taken by Hikoma Ueno known as the father of photography in Japan, was discovered recently. From the letters and patterns printed on the back of the mounting base of the McGiffin photograph, it has been verified that the photograph was taken at “Ueno Photography,” a photography studio opened by Hikoma in Hong Kong. Hikoma opened the Vladivostok branch in 1890 and the Shanghai and Hong Kong branches in the following year 1891. Accordingly, it is assumed that the portrait photograph of McGiffin was taken somewhere between 1891 and 1895. McGiffin commanded the flagship “Chen Yuen” belonging to the Northern Chinese Fleet (Qing Dynasty) at the Battle of Yellow Sea on September 17, 1894 during the Sino-Japanese War. He was a navy man who graduated from the United States Naval Academy in Annapolis. Details about McGiffin have so far been shrouded in mystery. This study aims to reveal some aspects of McGiffin and modern Japan-China relations by demonstrating the historical background of McGiffin’s service for the Chinese Navy.

最近、近代中日関係史における謎の人物マッギフィンの肖像写真が上野一郎氏によって発見された。マッギフィン写真の台紙裏の文字と模様から、上野彦馬が営業写真師として香港に開業した香港支店、「上野照相館」で撮影したことが判明した。上野彦馬は1890年（明治23年）にウラジオストック、翌年の1891年に上海、香港に、それぞれ支店を開設して、香港支店長は上野才造である。大隈孝一氏によれば、日本企業国際化の先駆者として、「日本人で『Photographer』と名乗ったのは、上野彦馬が最初だった」、「彼が上海や香港で撮影した、照片の表と裏に、筆記体の英語で、この職業名と、彼の名前『H.Uyeno』と、スタジオのアドレス、更には中国語で「上野照相」と、所在が焼き付けてある」。⁽¹⁾ このマッギフィンの肖像写真はおそらく日清戦争（甲午戦争）の直前、すなわち明治24～27年（1891～94年）の間に撮影されたと推定される。

マッギフィンは1883年に米国アナポリス海軍士官学校を卒業後、清王朝の北洋水師に従軍、1894年に日清戦争の勝敗を分ける黄海海戦に参戦した。また司馬遼太郎によれば、彼が「清国にやとわれ、この艦隊の参謀のひとりとして」、当時世界の最新鋭の戦艦「鎮遠」号の副艦長（邦帯）を務めており、貴重な「黄海海戦」という実見録を残している。⁽²⁾ この写真は上野彦馬写真史の研究⁽³⁾ だけではなく、マッギフィンの研究においても今まで知られていなかった貴重な歴史的資料だと言える。

マッギフィンに関しては、前述した「黄海海戦」という実見録があり、この実見録は1895年にアメリカの海軍誌『世紀雑誌』に掲載されたものである。同時代のアメリカの著名な海軍戦略家・歴史学者のアルフレッド・T. マハン（Alfred T. Mahan）は、マッギフィンの「黄海海戦」が最新兵器を用いた実戦の当事者の記録であり、その史料価値を高く評価している。⁽⁴⁾ 中国の学者は、従来マッギフィンの「黄海海戦」を甲午戦争の重要な研究資料として取り扱っていた。⁽⁵⁾ 一方、当時「定遠」の副艦長（副邦帯）を務めた英国人のW.F.タイラー（William Ferdinand Tyler）はマッギフィンの実見録に批判的であり、馬幼垣はその記述の誇張によって、真偽が判定し難い面があると評価している。⁽⁶⁾ 黄海海戦の際、旗艦の「定遠」にはW.F.タイラーが乗っており、「鎮遠」にはマッギフィンが乗り込んでいた。二人ともこの海戦について詳細な実見録を残したことは周知の通りであるが、長期間にわたるタイラーの記録は中国の学者に少なからぬ影響を与えた。ところで近年大方の研究者の間では、マッギフィンの「黄海海戦」の実見録に対する評価が高まり、W.F.タイラーの記録にはかなり偏見が多いと指摘している。⁽⁷⁾



香港「上野照相」館にて撮影されたマッギフィンの写真 (Dr.James R. Nortonの提供により)

マッギフィンの生涯に関する紹介は数少ないが、彼と同郷であるマッギフィンと同様にペンシルベニア州出身のリチャード・ハーディング・デイヴィス（Richard Harding Davis）の書いた「マッギフィン大尉」という伝記がある。デイヴィスはマッギフィンと同時代の軍事ジャーナリストで、独自の取材をしている。彼の著書にはマッギフィンの信書が多く使われ、資料の信憑性が高く、今日でもマッギフィン研究の不可欠の資料である。⁽⁸⁾ なお、1968年にノンフィクション作家のリー・マッギフィンはマッギフィンに関する長編伝記を出版している。⁽⁹⁾ この伝記はマッギフィンが残した信書、手記、新聞報道を根拠に書かれており、彼に関するもっとも充実した伝記だと言えよう。しかし、一部の論者はその本の根拠となったマッギフィンの信書に少なからず間違いがあり、慎重に読み解く必要があると指摘している。⁽¹⁰⁾

これらの先行研究を踏まえ、本稿はマッギフィンとその時代の関わりを実証的に整理しながら、新発見の上野彦馬の写真を手がかりに彼の人物像の解明に焦点を当てる。第一に、清仏戦争の歴史背景を通じて、マッギフィンの中国北洋海軍に従軍した動機を明らかにし、第二に主としてマッギフィンの天津水師学堂における役割を通じて、いままで十分に明らかにされなかった黄海海戦における砲術と魚雷の問題に触れることにしたい。なお、マッギフィンと黄海海戦に関しては、今後の研究に譲りたい。

1. 中国海軍従軍の動機とその時代的背景

マッギフィンは1860年12月13日、アメリカのペンシルベニア（Washington, Pennsylvania）に生まれた。祖父は1812～14年のアメリカの第二次独立戦争に参加した、スコットランド（Scotland）からの移民である。父親は1846～48年のメキシコ戦争、また1861～65年のアメリカの南北戦争に参加した、陸軍大佐である。マッギフィンは生まれながらこの誇り高い軍人家族の伝統を受け継ぎ、⁽¹¹⁾ 1877年に高校を卒業後、大統領トーマス・ジェファースンを記念してその名を冠したジェファースンカレッジ（Jefferson College）に入学したが、まもなく州の議員に頼んでメリーランド州のアナポリスにある海軍兵学校に転校した。アナポリス海軍士官学校の正式の英語名称は「The United States Naval Academy, Annapolis, Maryland, U.S.A.」であり、1845年に海軍長官ジョージ・バンクロフト卿によって設立された。アメリカ海軍とアメリカ海兵隊の士官を養成する名門校であり、イギリスのダートマスにあるイギリスの海軍兵学校（Britannia Royal Naval College）、日本の江田島にある旧日本軍海軍兵学校と並んで世界の三大海軍兵学校として知られていた。これらのことから、マッギフィンが若い頃から海軍軍人に憧れを持っていたことが分かる。⁽¹²⁾

マッギフィンが清王朝の海軍に従軍することを決意した背景には、次のようなことがある。19世紀半ば以後、度重なる西洋列強の中国への軍事侵略の中、当時アメリカと清政府は平穏な関係であった。この時期にマーチン（W.A.P. Martin）宣教師は清の同文館と京師大学堂

で総教習を務めており、任期満了の米国中国駐在大使のアンソン・バーリングゲーム（Anson Burlingame）は清政府によって中国人欧米使節団の団長（大臣級）に任命され、中国で活躍していた。⁽¹³⁾ 中国人欧米使節団は日本や欧米諸国を訪問し、アメリカのサンフランシスコ、ワシントン、ニューヨークを歴訪した際、アメリカ国内どこでも大歓迎を受け、アメリカの国民はこの神秘的な極東の大国に大きな関心を示した。⁽¹⁴⁾ もちろん中国海軍志願の直接の原因は当時米国海軍の規模はまだ小さく、法律変更によりアナポリス海軍士官学校で海軍に採用される人数は12人とされ、マッギフィンが採用されなかったことにあった。彼が中国海軍に興味を持ったのは、清仏戦争が進行していたからである。⁽¹⁵⁾

19世紀の後半にフランスは、清王朝とインド洋の間にある南海（南シナ海）に足場を確保しようとして、インドシナ侵略を開始していた。1858年に宣教師事件を口実にスペインと共同でダナンとサイゴン（現在のホーチミン市）を攻撃し、占領した。1861年に第二次アヘン戦争後、仏軍が仏安戦争を起こして、メコン・デルタ三省を占領した。その翌年、ベトナムはフランスと第1次サイゴン条約を締結して、この条約によってベトナム南部のコーチシナ（フランス人によるベトナム南部の呼称）の数省をフランスへ割譲した。

ベトナムと中国の雲南・広西両省と境界を接しており、中国を宗主国とする東アジア社会における朝貢・冊封関係を保ってきた藩属国であった。⁽¹⁶⁾ 1873年にフランスはハノイ城を侵攻し、これに対してベトナムは清出身の劉永福の黒旗軍に援兵を要請し、激戦の末、フランスは退却した。しかし、ベトナムはフランスの報復を恐れ、1874年、両国の間に「仏越講和同盟条約」（第2次サイゴン条約）で結ばれ、紅河の運航権と主要都市への駐兵権、領事裁判権がフランスに与えられた。1882年にフランスは再びハノイ城を制圧し、紅河デルタの要地を占拠した。これに対してベトナムは清に出兵を要請し、清国政府はベトナムを支援し、劉永福の黒旗軍がハノイに進撃、フランス軍司令官アン・リ・リヴィエールを倒し、大きな勝利を勝ち取った。⁽¹⁷⁾ しかし1883年7月16日に対外強硬路線のトゥドック帝（嗣徳帝）が死去したため、皇位争奪内紛により新即位のヒェップホア（協和帝）はフランス軍に庇護を求めた。1883年8月25日、フランスはベトナムと第1次フエ条約（アルマン条約）を結び、ベトナムを保護国にした。翌年6月6日にベトナムはフランス公使パトノウトルと、パトノウトル条約（第二次フエ条約）に調印した。これ以後、フランスは外交関係においてベトナムを代表し、フランス代表の総督はベトナムの外交を統括し、保護権を行使することになり、ベトナムは中国との藩属関係が終わり、実質的にフランスの植民地になった。⁽¹⁸⁾

清政府はこれを認めず北洋大臣の李鴻章を派遣して対応させた。李鴻章は1870年に曾国藩の後を継いで直隸総督に就任、清朝の河北省、山東省、遼寧省の沿海地方における外交、国防、税関を管轄した北洋大臣を兼ねていた。その就任翌年の1871年（明治4年）7月、日本では明治政府が藩を廃して府・県を置くという「廃藩置県」が行われ、全国的に実施した郡県制

を琉球に導入した。琉球は1609年（慶長14年）より、幕藩体制の下で薩摩の付属国として位置づけられ、またその時期に中国とも伝統的な進貢・冊封を維持し続けた「両属的」な藩国である。⁽¹⁹⁾

そのため、清政府は琉球の帰属をめぐり明治政府との間に亀裂が生じた。清政府は1874年の台湾出兵、1875年の江華島事件の紛争対応に手を焼いていた。明治政府の最終処分である「廃藩置県」に対して、1878年（明治11年）、清政府は駐日公使何如璋を通して明治政府に琉球処分についていろいろと抗議を行ったが、明治政府は翌年の4月に沖縄県設置を布告した。清政府と明治政府の間に琉球・台湾・朝鮮の問題をめぐり関係が緊迫化し、中国は次第に日本を脅威と見なすようになった。⁽²⁰⁾

李鴻章は中国が日本と「藩属国」をめぐり係争を抱え、また「海防（国防）」、「武装（軍備）」、「水師（海軍）」の近代化は欧州列強より遥かに遅れているため、簡単にフランスと戦争することを言うべきではないと主張し、1883年にフランスの中国駐在公使ブレー（Bourrée）と「李・ブレー条約」を結んでいたが、フランス政府は受け入れることなく撤回した。⁽²¹⁾ 1884年4月に李鴻章はさらにフランスの海軍中佐フランソア・エルネスト・フルニエ（F・E・Fournier）と交渉し、「天津協約」（「李・フルニエ協定」）を結んだ。清の軍隊はトンキンから撤退し、フランスは賠償を請求しないことに合意した。しかし清政府は主戦派の圧力を受け、「李・フルニエ協定」の批准を遅らせ、フランスは武力行使による「李・フルニエ協定」の施行を迫り、清仏の「馬江海戦」に発展していった。

中国海軍の従軍に夢を託したマッグフィンはこの清仏海戦に大きな関心を持っていた。⁽²²⁾ 当時、フランスの侵攻に備えて対峙したのは、台湾、福州海面の巡守を担当した福建船政水師だった。福建船政水師は福建船政局と「福建船政学堂」の建設に端を発し、中国近代海軍と軍事学校の草分け的存在であった。⁽²³⁾ 1866年に閩（福建省）浙（浙江省）総督の任にあった左宗棠は福建福州に船政局を設立し艦船及び砲器を製造し始めた。また求是堂芸局を開設し、造船と航海技術に関する海軍軍人育成に着手した。1867年に左宗棠は安徽省や河南省、山東省などの華北地域で蜂起した農民反乱軍の「捻軍」を平定するため陝甘に転任することになった。沈葆楨は左宗棠の推薦を受け福州船政大臣に着任、馬尾造船所と関係海軍施設をさらに整備することに努めていた。求是堂芸局は福建馬尾に移転すると船政学堂と改称し、ヨーロッパから技術者や教官を招聘し、後に「閩党」（福建船政学堂人脈）までと言われるほどの中国の近代海軍創設期における海兵士官学校の大きな存在となった。⁽²⁴⁾ その後1894年に「黄海海戦」に関わった北洋艦艇の艦長はほとんど福建船政学堂の出身者であった。

1884年8月23日に馬江海戦に参戦した「揚武」、「伏波」、「飛雲」、「振威」など11隻の主力戦艦はたいてい福州船政局が製造して提供したものであり、水兵も福建船政学堂から来た者であった。⁽²⁵⁾ 福建船政水師の艦隊は木鉄構造の艦体であり、フランスの戦艦に劣っていたものの、

それなりの砲器を装備しており、軍勢は侮れないものであったと言われる。⁽²⁶⁾しかし海戦の結果として、たった30分間で福建船政水師はほぼ全軍が潰滅し、戦争とは言えないような戦いをする結果になった。フランス艦は攻撃に成功し、損害はきわめて軽微で、福建船政水師の艦隊は軍艦2隻が川上に逃れたほか、9隻は沈没した。そして福建船政水師の死傷はおよそ3千人、戦死者が700人に対して、フランス側の死傷はたった30名程度、その中死者は6名だけであった。⁽²⁷⁾馬江海戦の三日後に清政府はフランスに宣戦を布告し清仏戦争が始まった。フランス艦隊はその後さらに台湾のキールンを砲撃し占領、台湾海峡を封鎖して、台湾と大陸の通商路を遮断した。翌1885年3月にフランス軍は、澎湖諸島を陥落させ、南部と北部の両面から台湾を挟み撃ちする態勢となった。

清仏戦争の最中、マッグフィン⁽²⁸⁾は1985年2月に生まれ故郷を出発、サンフランシスコにある中国公使館で中国入国の手続きを取り、その際に中国語の漢字名「馬吉芳」を名づけてもらい、期待に胸を弾ませていた。⁽²⁸⁾彼が乗った汽船は日本の長崎に立ち寄り、4月13日に天津に到着した。汽船は長崎から上海に向かう途中、台湾海峡を封鎖しているフランスの軍艦からずっと尾行監視され、戦争中の物々しい雰囲気⁽²⁹⁾に包まれていた。

一方、マッグフィンの中国到着直前の3月23・24日に、清王朝の軍隊は反撃してベトナム北部のランソン攻略の勝利を勝ち取り、戦局は一気に和平の方向に転じるようになった。清仏停戦のムードは清仏海戦で海軍軍人の志を実現したいマッグフィンにとっては、まるで寝耳に水のようなことであった。このマッグフィンの心情は母親宛の手紙に「私は手紙を書く気がしない。なぜなら、私は将来のことがどうなるかわからなくなった」と記していたことからわかる。マッグフィンは汽船が天津港に停泊した後、直ちに行動した。彼は中国駐米公使の紹介状を持って、天津駐在の米国領事館を通じ、李鴻章に働きかけることにした。さらに船長を李鴻章が謁見する機会に、直接李鴻章に中国の海軍に従軍したい願望を出した。⁽³⁰⁾

その時に李鴻章は、1884年10月に起きた甲申事変の善後処置のため、伊藤博文と天津で交渉を始めていた。日本全権大使の伊藤博文は1885年3月14日にいったん北京に入ったのち、天津に戻り李との交渉に臨んだ。⁽³¹⁾4月3日から4月15日にかけて6回の会談を重ね、4月18日に李鴻章と伊藤博文は「中日天津会議専条」（「天津条約」）に調印し、日中両国の軍隊は4ヶ月以内に朝鮮から撤退することを約束した。⁽³²⁾それと同時進行で、4月の4日に中仏双方はパリで「清・仏停戦条件」と「停戦条件解釈」を結んでおり、「李・フルニエ協定」を承認して停戦と撤兵を行った。李鴻章は一貫して日清間の朝鮮問題は台湾支援より切迫しているので、曾紀沢らと一緒にランソンの勝利に乗り、和平を交渉すべきだと、主戦論者の反対を押さえ対仏講和にこぎ付けた。⁽³³⁾1885年6月に李鴻章は天津でフランスの天津駐在公使パトノールとの間で「清仏新約」（「清仏天津講和条約」）を結び、清仏戦争は収拾することになった。このような背景の中、マッグフィンは李鴻章との面会が実現でき、李鴻章の推薦により天津水師学堂

の教員となった。

2. 北洋水師学堂の米国人教員

福建船政水師の壊滅が清政府に与えた衝撃は大きく、李鴻章はいち早く清政府に、「馬江海戦」の失敗を教訓に鉄甲船の購入、海軍衙門の設立、造船と砲台の建設、海軍人材の選抜、「水師根幹」の強化を提案した。⁽³⁴⁾ 李鴻章は従来軍隊訓練の理念として、陸軍はドイツを手本にし、海軍はイギリスを手本とすることを掲げていた。清政府が雇い入れた外国の顧問にイギリス人が43.31%を占めたのに対し、アメリカ人はわずか6.36%しかいなかったことに示されたように、李鴻章は当初はアメリカの海軍に対する関心が薄かった。⁽³⁵⁾ そのため、李鴻章は最初にマッギフィンの要求に戸惑いを隠し切れなかった。マッギフィンが李鴻章に、清政府が新規購入した魚雷艇を指揮するため、揚子江の防衛艦隊に入りたいと申し出た時、李鴻章はマッギフィンの要求を受け入れることにした。

なぜなら、自力で推進する魚雷は、1860年代にオーストリアにいた英技師ロバート・ホワイトヘッドがオーストリアの元技術士官イワン・ルピス・ヴュキ（Ivan Lupis-Vukić）らの構想を改良して発明した最新鋭の海軍兵器であったからである。世界で最初の魚雷「Minenschiff」は1866年に完成した後、1870年代に入り914m以上の射程を持ち、6ノットの速さを持つ有力の兵器として、すでに量産することになり、急速にイギリス、フランス、イタリア、ドイツなどの海軍に配備されるようになった。1880年代半ばになると魚雷は24ノットに達し、当時の最速の艦船でも15ノットしか出せなかったため、魚雷を避けることは非常に困難なこととなった。

李鴻章は1874年に天津でロシアの軍艦を見学した際、魚雷の威力に強い印象をもった。翌年、彼は北洋水師の設立に携わり、イギリス人のハート（Robert Hart）らを通じて魚雷艇を購入しようとしたが、購入したのは魚雷艇ではなく、砲艦であった。⁽³⁶⁾ 魚雷に知識を持つ人材がなく、度々魚雷の購入に失敗したのだ。

1880年から1883年にかけて、李鴻章の提案により李鳳苞、徐建寅らはドイツのフルカン造船所に発注した。⁽³⁷⁾ その際に常備排水量7,335トンの大型戦艦「定遠」号、「鎮遠」号に38cmの魚雷発射管3門・小魚雷艇3隻、2,300トンの「濟遠」号巡洋艦に38cmの魚雷発射管4門・小魚雷艇2隻を発注して装備させ、また11隻の魚雷艇を購入した。この時期魚雷に関する認識として、清仏戦争の時期、陝西巡撫から両広総督に昇格した張之洞の見解が挙げられる。張之洞は広東に水陸師学堂や槍砲廠などを設立して海上防衛に積極的に携わり、魚雷に大変関心を持っていた。彼は魚雷が強烈であり、ひとつの物に船、大砲、爆弾の機能を持ち合わせているので、大いに購入すべきだと強調した。⁽³⁸⁾ このように、清の海軍にとっては新しい艦艇に適応できる海軍人材の育成が緊急な課題となっていたのである。そのため、李鴻章はドイツ

や英国から魚雷に精通する教官を急募していた。⁽³⁹⁾ 李鴻章はマッギフィンが魚雷艇を指揮すると聞いて、マッギフィンを南洋水師ではなく、自ら設立した「天津水師学堂」に薦めることにした。当時、南洋海軍は主として江寧、呉松、浙江などの沿海に停泊し、東南沿海海面の守衛を担当しており、揚子江防衛の艦隊は南洋海軍の管轄下にあった。

清王朝の海軍は太平天国の乱を平定する過程において、曾国藩、丁日昌らが提起した「三洋水師」の構想を日本との緊張関係の中で海防論に具現化したのである。⁽⁴⁰⁾ 1874年に清政府は、日本の台湾出兵を適切に対処し得なかったことを認め、総理衙門で作成した海防充実のための6カ条の中に1868年に江蘇巡撫の丁日昌が上奏した「海洋水師章程」を取り入れ、「練兵」、「簡器」、「造船」、「籌餉」、「用人」、「持久」など六つの海防増強の措置を打ち出した。1875年5月には北洋・東洋・南洋の三洋水師の設立方針を定めた。1875年に軍艦8隻を購入し最初に李鴻章の淮軍系の北洋水師を設立して、その後に北洋、南洋、福建、広東の4水師で編成されていた。北洋水師の守備範囲は大沽、旅順、營口、煙臺から奉天、直隸、山東までの海域にわたっている。1875年から馬江海戦までの10年間に、清政府はすでにイギリス、ドイツなどから戦艦15隻を購入し、北洋・南洋・福建・広東の三つの水師に装備した。

天津水師学堂は福建船政学堂に続き、北洋水師の海軍人材を育成するために1880年7月に李鴻章が清政府に上奏して開校された。⁽⁴¹⁾ 「馬江海戦」失敗後、福建船政学堂に代わる清王朝の海軍士官学校であった。五年制のカリキュラムであり、その内一年間は艦艇での実習であった。船舶運転と船舶のタービンという二つのコースがあった。科目に英語、地形地図、数学、物理、化学、算数、幾何学、船舶運転、銃砲使用、航海天文などあった。登用した教員の多くは福州船政学堂の出身者であり、英国グリニッジの海軍大学の留学組であった。その中に天津水師学堂で「総教習」の教鞭を執った嚴復や、また民国初期海軍の海軍部長、内閣総理になった薩鎮冰ら著名な海軍のエリートらがいた。卒業生に民国初期の副大統領、大統領などを歴任した黎元洪や天津南開大学の創始者張伯苓などの著名人物を輩出した。1900年、八国連合軍が天津に侵攻した時に焼かれ廃校となった。当時天津水師学堂の学生の質の高さには定評があった。⁽⁴²⁾ 天津水師学堂は天津城東賈家沽道（現在天津河東区東局子）の天津機械製造局の敷地内にあったため、マッギフィンはここを機器局水師学堂と称していた。⁽⁴³⁾

マッギフィンはまる一日の厳しい試験を切り抜けて採用された。試験の科目には船舶運転、銃砲使用、航海天文、代数、幾何学、微積分などが含まれていた。ここに注目すべきことは、マッギフィンは試験について当時非常に必要とされた最先端の魚雷に関する問題は言及されていなかった点である。当時の試験科目に魚雷の科目が出題されたかどうか、また仮に出題された場合、マッギフィンが答えられたかどうかは、現在不明である。言うまでもなく、今後さらなる資料の発掘が必要である。あらためて前述の唐徳剛によるマッギフィンに対する評価を点検すれば⁽⁴⁴⁾、魚雷という軍事知識だけに限定すると、マッギフィンの魚雷知識は

たしかに時代的な限界があったことは否定できない。というのは、初期のホワイトヘッド式魚雷は単純なジャイロ誘導であり、直進することしか出来なかったため、発射の安定性度は低く、射程距離も短いものであった。そのため、アメリカは初期ホワイトヘッド式魚雷を取り入れなかった。

米国の魚雷は南北戦争中の時期において、南部海軍の沿岸防衛を指揮したマシュー・マウリー提督（Matthew Fontaine Maury）の電池を魚雷の動力とする開発が最初の試みとしていた。1870に米海軍士官のJ.A.ホーウェルがホーウェル式魚雷を発明することによって、アメリカはホーウェル式魚雷を採用した。この形式の魚雷は1891年に完成し、その構造はホワイトヘッド式魚雷とは大きく異なっていた。このようにマッギフィンが、ホーウェル式魚雷に関してはその知識に限界があったことは明らかである。⁽⁴⁵⁾

より構造的な問題として、当時北洋水師の魚雷に関する知識は戦艦とともにドイツから学んだ。⁽⁴⁶⁾ 黄海海戦の前、清政府が欧州に派遣した海軍留学生はイギリスで船舶運転を習い、フランスで造船と銃砲製造を学んだが、魚雷に重点はおいていなかった。数名がドイツで専門的に魚雷の知識と技術を学んだが、李鳳苞の証言によると、ハイテクの技術は学べなかったという。⁽⁴⁷⁾

マッギフィンにとって、この採用試験は決して容易なものではなかった。5問1組の質問に答えられたのはせいぜい3問程度の様子であった。幸いにマッギフィンはアナポリス海軍士官学校の時に、船舶運転の科目はとても優秀であり、その強みは試験の結果につながった。⁽⁴⁸⁾ 加えて天津水師学堂のコースに船舶運転があり、彼は採用されることになった。

マッギフィンは天津水師学堂で船舶運転、銃砲使用、航海天文学の科目を担当した。月俸は100両銀貨で、当時西洋人顧問の月俸よりやや低い程度であり⁽⁴⁹⁾、同じ中国人教員の10倍に相当するものである。彼はまだ24歳の若さで、自分の報酬にかなり満足していたようだ。彼は母親宛の手紙に次のことを頼んだ。

本の扉に海軍研究所と書かれた本、例えば銃砲使用、大地測量、船舶運転、数学、航海天文学、代数、幾何学、球面三角学、二次曲線、微積分、機械学など、すべて箱に入れて、私に送るようにしてください。……私は勉強、仕事、そして中国語を習わなければならない。ここでは私が船舶運転を教えることだけではなく、銃砲使用も教えていることになる。⁽⁵⁰⁾

この手紙からマッギフィンの仕事に対する熱心さが伝わってくる。マッギフィンは当時中国海軍にある外国顧問の中でもっとも職務に精励した西洋人顧問だと評価されていた。中国滞在中、彼の中国語は李鴻章を驚かせるほど流暢になったということも彼の仕事に対する熱心ぶりを物語っている。1890年からマッギフィンは威海水師学堂の「洋教習」として昇進した。⁽⁵¹⁾ 日清戦争における黄海海戦に参加した砲術長の多くはマッギフィンが指導したことのある学生だった。

マッギフィンの「黄海海戦」によると、なぜ日本人に敗北させられたのかという疑問がよく彼に向けられていた。答えはこうだ。日本は我々より良い軍艦をもち、艦艇数が多かった。質のよい弾丸をもち、豊富に供給された。そしてよく訓練された良い将校と水兵をもっていたからだ。けれども日本人も認めた通り、弾丸の命中率は清軍の方が良かった。日本の命中率は約10%だが、清軍は20%に達していただろうと。⁽⁵²⁾

黄海海戦では、北洋艦隊が5隻撃沈され、鎮遠が大破の損害を受けた。マッギフィンは日本の艦艇で大破した2隻の内、「松島」旗艦の着弾についてはこう記した。「三時頃、『鎮遠』と『松島』までの距離が1700メートルになったとき、鎮遠がチャンスを捉えて、90ポンドの火薬を入れた12.2インチの巨砲が轟然と火を吐いた。巨弾は松島に命中した」⁽⁵³⁾という。松島に的中したのは、「鎮遠」なのか、「定遠」なのか、見解が分かれているが、日本連合艦艇に乗り組んだ松島水雷長の木村浩吉大尉は「鎮遠」の30センチ砲弾が二発、松島左舷下甲板に命中したと記録した。⁽⁵⁴⁾これに対して川崎三郎の『日清戦史』は「定遠」による発射だという。⁽⁵⁵⁾中国側資料の記載では「定遠」の銃砲長沈寿堃が発射したと見られていた。沈寿堃は天津水師学堂の一期生、卒業後「威遠」号の実習船で実戦演習を経て、英国グリニッジの海軍大学に留学したことがある。沈寿堃によると、北洋水師の銃砲訓練が正確さに正確を求め、熟練に熟練度を求めているという。⁽⁵⁶⁾日清戦争当時、連合艦隊旗艦・松島の水雷長の木村浩吉大尉は清側の「砲員の技量は、決して侮れないものがあつた」と評した。⁽⁵⁷⁾

天津水師学堂出身の銃砲・魚雷長

艦艇名	排水量 ^ト	砲力	氏名	軍職	出身軍事学校
定遠	7,335	30×4	沈寿堃	一等銃砲長	天津水師学堂
鎮遠	7,335	30×4	曹嘉祥	一等銃砲長	天津水師学堂
濟遠	2,300	21×2	穆晋書	一等魚雷長	天津水師学堂
			楊建洛	二等魚雷長	天津水師学堂
經遠	2,900	21×2	韓錦	二等銃砲長	天津水師学堂
来遠	2,900	21×2	徐希顔	一等魚雷長	天津水師学堂
致遠	2,300	21×3	薛振声	一等魚雷長	天津水師学堂
			黄乃謨	二等魚雷長	天津水師学堂
			楊澄海	三等魚雷長	天津水師学堂
靖遠	2,300	21×3	洪桐書	二等銃砲長	天津水師学堂

資料出所:張俠他編『清末海軍史料』(海洋出版社、北京、1982年、第440～442頁))により作成。

上述の資料から明らかにされたように、黄海海戦に参戦した北洋海軍主力艦の銃砲長と魚雷長の精鋭は天津水師学堂出身の軍人であったことが分かる。

本論文では、上野彦馬が撮影した1枚の写真から、マッギフィンについての資料研究を行ってきた。マッギフィンという人物の中国海軍従軍動機とその果たした役割の側面は、以上

の分析からある程度明らかになったといえよう。何よりもまず、マッグフィンが中国北洋海軍に従軍した動機としては、その軍人伝統の家族の強い影響があり、これはその後彼を精神的に苦しめた原因ともつながった⁽⁵⁸⁾。もちろん、より直接的な動機としては彼がアナポリス海軍学校を卒業後、米国の海軍に就役できなかったことにあったことはいうまでもない。第二にマッグフィンが中国近代海軍設立期に果たした役割は、厳格な船舶運転や砲術訓練などにより数多くの天津水師学堂出身の精鋭の海軍軍人を育てることに寄与したことである。彼らはその後中華民国初期の海軍の指導者、また政治家として活躍したのである。しかしながら後に日清戦争の勝敗を分ける黄海海戦の結果として、清軍は大敗を喫したが、砲術の面において清軍が勝っていたことは、おおかたの見解である。黄海海戦において、日本の主たる水雷戦力は魚雷艇である。日本の魚雷は大きな威力を発揮し、北洋海軍の三隻の軍艦（定遠号、来遠号、威遠号）が魚雷に撃沈された⁽⁵⁹⁾。北洋海軍の魚雷艇はほとんど役に立たなかったことだけではなく、「黄海海戦」が勝つか負けるかの瀬戸際に10隻の魚雷艇は集団で戦場から逃亡し、黄海海戦の清軍失敗の大きな敗因となった。⁽⁶⁰⁾ これとは対照的にマッグフィンは北洋海軍の主力艦「鎮遠」号の副艦長として陣頭指揮し、また天津水師学堂の銃砲使用などの教育に大きな役割を果たしたことが窺える。

本研究は産業能率大学2006年度共同研究費、産業能率大学国際経営研究所の助成を受けて掲載したものである。なお、研究にあたっては、吉田文一先生をはじめ、多くの方の助力をいただいた。あわせてお礼を申し上げさせていただく次第である。

- (1) 大隈孝一編「上野彦馬 香港スタジオ跡の写真と関連資料」(『龍馬精神・崎華往来』オフィス隈、2003年、第14頁、自由が丘産能短期大学図書館所蔵)。上野一郎氏の研究によると、この種の台紙は明治24~28年(1891~1895年)の間に使われていたという(上野一郎「撮影年代を推定する—人物像・写場・小道具・台紙裏から—」、鈴木八郎(他)監修、『写真の開祖 上野彦馬: 写真にみる幕末・明治』、産業能率短期大学出版部、1975年、205~215頁)。上野彦馬が海外(香港)に渡航する時、日本郵船の船(鹿島丸)の同行者として、長崎に来日したイギリス人貿易商トーマス・ブレイク・グラヴァーがいた。トーマス・ブレイク・グラヴァーと上野彦馬との関係はいまだに十分明らかになっていないが、香港で上野彦馬によりグラヴァーの写真が撮影されていることは大隈氏により明らかにされている(「上野彦馬香港にてグラバ撮影す」『週刊新潮』、2003年1月23号)。
- (2) 司馬遼太郎「日清戦争」(『坂の上の雲(一)』文藝春秋、2004年)、第375頁。Philo N. McGiffin, *The Battle of the Yalu: Personal Recollections by the commander of the chinese ironclad Chen-yuen*, *Century Magazine*, 50:4 (August, 1895), pp. 585~604. また別宮暖朗「日清戦争の黄海海戦」(『日本海海戦』、並木書房、2005年、第52~55頁)を参照。
- (3) この点については、前掲『写真の開祖 上野彦馬: 写真にみる幕末・明治』、八幡政男著『幕末のプロカメラマン 上野彦馬: 文明開化の先駆者たち 1』(長崎書房、1976年)、同『日本最初のプロカメラマン』(武蔵野書房、1993年)、亀井茲明『日清戦争従軍写真集帖』(柏木書房、1992年)。上野彦馬(ほか撮影)、長野重一・飯沢耕太郎・木下直之編集『上野彦馬と幕末の写真家たち』(岩波書店、1996年)、安田克広編『幕末維新一写真が語る一』(明石書店、1997年)、小沢健志編『写真 明治の戦争』(筑摩書房、2001年)。上野彦馬〔撮影〕、馬場章編『上野彦馬歴史写真集成』(渡辺出版、2006年)、を参照されたい。
- (4) Alfred T.Mahan, *Lessons from the Yalu Fight* U.S.N.Century Magazine, August, 1895.
アルフレッド・T・マハン(Alfred Thayer Mahan, 1840~1914)は、海軍史研究の大家であり、地縁政治学者でもある。各国の海軍に大きな影響を与えた海軍戦略家として知られ、旧日本海軍は海軍大学校の図書室に全生徒に行き渡る部数を購入して、マハンの著書を置いてあったという(井伊順彦、戸高一成訳『海軍戦略』、中央公論新社、2005年)。
- (5) マッギフィンの「黄海海戦」実見録の中国語訳本として、帰興「美国海軍少校馬格奮躬歷是役述評」(『海事』第9巻第12期、1935年。第10巻第3期、1936年)。馬吉芬「鴨綠江外的海戦」(戚其章主編『中日戦争』第七冊、中華書局、北京、1996年、第271~286頁) 鄭天傑・趙梅卿『中日甲午海戦与李鴻章』(華欣文化事業中心、台北、1979年)、第96~106頁などがある。また戚其章「中日甲午戦争史的世紀回顧」(『歴史研究』、2006年第一期)を参照。
- (6) 泰萊(W.F.Tyler)「甲午中日海戦見聞記」『東方雑誌』第28巻第6-7期、1931年(Pulling strings in China, William Ferdinand Tyler London, Constable, 1929.)。馬幼垣「馬吉芬與北洋

- 海軍」(戚俊傑、劉玉明主編『北洋海軍研究』、第二輯天津古籍出版社、天津、2001年、第449～450頁)。
- (7) 戚其章「劉步蟾冒功說質疑」(『探索與争鳴』、2005年第一期)。なお、この点については戚其章『甲午戦争史』(上海人民出版社、上海、2005年、第116～147頁)を参照。
- (8) Richard Harding Davis ,Captain Philo Norton McGiffin, U.S.N.Century Magazine, Ibid. リチャード・ハーディング・デイヴィス(1864-1916年)は作家・戦争特派員でもある。戦争特派員として日露戦争を戦地取材したことがある。その小説に邦訳の物として「フランスのどこかで」(丸谷才一編、河野一郎他訳『世界スパイ小説傑作選1』、講談社文庫、1978年)などが挙げられる。また、李軍他「『鎮遠』号上洋艦長」(『知識窓』、2006年第三期)を参照。
- (9) Lee McGiffin,Yankee of the Yalu : Philo Norton McGiffin, American captain in the Chinese Navy (1885-1895) ,New York : Dutton, 1968. 9p.)。
- (10) 紀栄松「甲午海戦清艦接戦陣形析探」(戚俊傑、劉玉明主編『北洋海軍研究』第三輯天津古籍出版社、天津、2006年、第108頁)。また前掲馬幼垣「馬吉芬與北洋海軍」、第435～458頁を参照。
- (11) Lee McGiffin,Yankee of the Yalu : Philo Norton McGiffin, American captain in the Chinese Navy (1885-1895) ,New York : Dutton, 1968. 13p～23p.
- (12) 唐徳剛教授はその『晚清七十年』の著書でマッギフィンを「営混子(兵隊ゴロ)」と揶揄したが、事実とは反している(唐徳剛「為黄海血戦平反」、『晚清七十年』、远流出版股份有限公司、台北、1998年)。なお、馬幼垣がLee McGiffinの資料だけで、アナポリス海軍士官学校でのマッギフィンに対する評価は明らかに公正さが欠いている(前掲馬幼垣「馬吉芬與北洋海軍」、第44頁)。
- (13) 丁韞良(W.A.P.Martin)著『花甲憶記:一位美国传教士眼中的晚清帝国』(广西师范大学出版社、桂林、2004年)。なお、アンソン・バーリングゲーム(Anson Burlingame,1820-1870)は中国名が蒲安臣で、13期目の米国中国駐在大使だった(阪本英樹『月を曳く船方―清末中国人の米欧回覧』、成文堂、2002年)。
- (14) 前掲阪本英樹『月を曳く船方―清末中国人の米欧回覧』を参照。
- (15) Richard Harding Davis ,Captain Philo Norton McGiffin, U.S.N.Century Magazine, Ibid
- (16) 王鴻寿「法越兵事及和約」(『清史記事本末卷六十・清史本末』(上海書店、1986年)、第435頁。浜下武志『朝貢システムと近代アジア』、岩波書店、1997年、第33～56頁。また安部健夫「清朝と華夷思想」(『清代史の研究』、創文社、1981年、第33～58頁)を参照。
- (17) 張宏年「清代藩属觀念的变化與中国疆土的变化」(『清史研究』2006年第四期)、また廖宗麟著『中法戦争』(天津古籍出版社、天津、2002年、第166～180頁)を参照。

- (18) 前掲王鴻寿「法越兵事及和約」(『清史記事本末卷六十・清史本末』)、第442頁。張振鷟主編『中法戦争』第五冊、(中華書局、北京、2006年)、第933～936頁。羅慈・墨菲著、黃磷訳『亜州史』(海南出版社・三環出版社、海口、2004年。Murphey Rhoads: A History of Asia, Addison-Wesley Education Publishers Inc, 2003.)。
- (19) 赤嶺守「清朝の対日琉球帰属問題交渉と脱清人」(石橋秀雄編『清代中国の諸問題』、山川出版社、1995年、第263～295頁)、前掲王鴻寿「藩属之喪失」(『清史記事本末卷六十一・清史本末』、第443～450頁。またこの問題については、坂野潤治・宮地正人「廢置県の政治過程」(『日本近代史における転換期の研究』、山川出版社、1985年、第62～68頁)、蕭一山『清代通史』第三冊(中華書局、北京、1986年)、第1033頁、石井孝著『明治初期の日本と東アジア』(有隣堂、1982年)を参照。
- (20) 王如絵「李鴻章与奕訢等総理衙門大臣対日本認識的比較」(前掲『北洋海軍研究』第二輯、第327～329頁)。また吉川万太郎「朝鮮の反乱事件と日本」(『近代日本の大陸政策』、東京書籍、1991年、第147～206頁)、高橋秀直『日清戦争への道』、東京創元社、1995年、第19～233頁)。また佐々木揚「同治年間における清朝官僚の日本観」(『清末中国における日本観と西洋観』、東京大学出版社、2000年、第3～65頁)を参照。
- (21) 前掲廖宗麟『中法戦争史』、第134～135頁、第180頁、河村一夫「清仏戦争の際の李鴻章：原敬在天津領事の観察を通じて見たる」(『近代日中関係史の諸問題』南窓社、1983年、第29～42頁)、また前掲佐々木揚「同治年間における清朝官僚の日本観」(『清末中国における日本観と西洋観』、第3～65頁)を参照。
- (22) Lee McGiffin, Yankee of the Yalu: Philo Norton McGiffin, American captain in the Chinese Navy (1885-1895). Ibid.
- (23) 張俠他編『清末海軍史料』(海洋出版社、北京、1982年)、第377頁、第744～788頁。池仲佑「海軍大事記」(『中国近代史叢刊第8冊、洋務運動』(上海人民出版社、上海、1961年)、第481頁。なお、「福建船政学堂」は福州船政学堂、馬尾水師学堂とも称される。
- (24) 陳学洵、田正平編『中国近代教育史料編 洋務運動時期教育卷』(上海教育出版社、上海、1992年)、同『中国近代教育史料編 留学生教育卷』(上海教育出版社、上海、1991年)を参照。なお、「閩党」は「福建船政学堂」の出身者をさす。彼らは近代中国海軍の創設期に大きな勢力を占め、福建船政学堂人脈と称される派閥となった。
- (25) 潘懋元「福建船政学堂の歴史地位與中西交流」・(『船政』第一集、馬尾船政文化研究会、福州、2004年4月)
- (26) 「福州戦報・上海特報」『東京日日新聞』、明治17年9月3日(水)号。
- (27) 池仲佑「海軍実記・述戦篇」(『清末海軍料』、海洋出版社、北京、1982年)第307～315頁。また前掲「福州戦報・上海特報」を参照。

- (28) Lee McGiffin , Yankee of the Yalu: Philo Norton McGiffin, American captain in the Chinese Navy (1885-1895) .Ibid.
- (29) Richard Harding Davis , Captain Philo Norton McGiffin, U.S.N. Century Magazine, Ibid.
- (30) Richard Harding Davis , Captain Philo Norton McGiffin. Ibid. なお、中国側の資料によるとマッギフィンが中国駐米公使の紹介による採用としていた（「北洋聘用洋員詳細資料」、戚俊傑、劉玉明主編『北洋海軍研究』第一輯（天津古籍出版社、天津、1999年）を参照。
- (31) 高橋秀直「天清条約の成立」（前掲『日清戦争への道』、第176～185頁）。
- (32) 戴東陽「徐承祖与中日『天津条約』」（『中国社会科学院近代史研究所青年學術論壇2005年卷』、社科文献出版社、北京、2006年）、また寶宗一編『李鴻章年（日）譜』（香港友聯書報發行公司、香港、1968年）、前掲『日清戦争への道』を参照。
- (33) 「出使俄英大臣曾紀沢電」（中国史学会『中国近代史資料叢刊 中法戦争』第六冊、上海人民出版社、上海、1959年）第367頁。李鴻章「寄譯署」（『李鴻章全集』第一冊、上海人民出版社、上海、1985年）第462頁。
- (34) 「直隸總督李鴻章奏」（『中国近代史叢刊第2冊、洋務運動』（上海人民出版社、上海、1961年）、第565～571頁。
- (35) 王家儉「國際科技轉移与北洋海軍建設—論洋員在洋務運動中的角色与作用」（前掲『北洋海軍研究』第一輯）を参照。
- (36) ハート（Robert Hart, 1835-1911）。1863年から1908年まで45年間在任し、4000名以上の職員を擁し、国家歳入の四分の一を占める中国の総稅務司として君臨していた。この問題については、陳霞飛主編『中国海関密档—赫德、金登干函電編』第二冊（中華書局、北京、1990年）第271～446頁。
- (37) 池中祐「海軍実紀、購艦編」（張俠他編『清末海軍史料』、海洋出版社、北京、1982年）、第168～170頁。顧廷龍・葉亞廉主編『李鴻章全集』電稿一、第一冊（上海人民出版社、上海、1985年）第104～284、345～346頁。
- (38) 張之洞「籌議海防要策析」（『張之洞全集』奏議、第一冊、河北人民出版社、1998年）、第310頁。
- (39) 同『李鴻章全集』電稿一、第一冊、第521～766頁。
- (40) 前掲『清史本末』、第321～第324頁。曾国藩「復陳購買外洋船砲折」（李瀚章、李鴻章編校『曾国藩全集・第四部奏稿（三）』（中国致公出版社、2001年）、1603頁。趙春晨『晚清巨擘—丁日昌』、広東人民出版社、広州、2001年）。また佐々木揚「海防論議と日本」（前掲『清末中国における日本観と西洋観』、第51～54頁）を参照。
- (41) 「李鴻章奏籌辦天津水師学堂片、（前掲『清末海軍史料』、第389頁）。また、于耀州、邢麗雅「清末海軍教育的緣起、演变及作用」、（前掲『北洋海軍研究』第二輯、第127～144頁）

を参照。

- (42) 林獻焄「海軍各学校沿革之概況（前掲『清末海軍史料』、第431頁。嚴復は清末著名な翻訳家、思想家でもあり、辛亥革命（1911年）後北京大学の学長を務めた。嚴復の「総教習」については論争がある。詳しくは馬自毅「『総教習』還是『洋文正教習』——嚴復任職北洋水師学堂期間若干史実考証」（『歴史研究』2004年第2期）、また史春林「嚴復任職北洋水師学堂期間若干史実再考証」（『福建論壇 人文社会科学版』2005年第3期）。薩鎮冰は20世紀の初期に北京政府の海軍部総長・國務院総理などを歴任した。なお、張焘『津門雜記』（1884年、天津古籍出版社、天津、1986年版）を参照。
- (43) 天津水師学堂の場所については、前掲張焘『津門雜記』。天津機械製造局は天津機器局（Tianjin Arsenal）と略称（前掲『津門雜記』、第156～157頁）、またマッギフィンの天津水師学堂の呼び方については、Richard Harding Davis ,Captain Philo Norton McGiffin.Ibid.を参照。天津水師学堂はよく北洋水師学堂と略称されたが、山東威海の劉公島に1890年に発足した威海水師学堂があったため、混乱を生じやすい。本文は両方を北洋水師学堂と称する。
- (44) 前掲唐德剛「為黃海血戰平反」。
- (45) アルフレッド・T・マハンもマッギフィンの「黃海海戰」に基づき、黃海海戰の砲術については詳細に検証を行ったが、魚雷に関してはほとんど言及されていないことは注目に値すべきである（Alfred T.Mahan, Lessons from the Yalu Fight U.S.N.Century Magazine, August, 1895. Ibid.）。
- (46) 「李鴻章向綏署抄送李風苞選雇德国官兵清單」（前掲張振鵬主編『中法戰爭』第2冊、1995年）、第448頁。
- (47) 「李鴻章籌議購船選將析」（『李文中全書』奏稿、卷25、光緒乙巳4月金陵版）を参照。
- (48) Richard Harding Davis ,Captain Philo Norton McGiffin.Ibid.
- (49) 戚其章「琅威理与北洋海軍」同『晚清史治要』中華書局、北京、2007年）、第380頁。また、前掲王家儉「國際科技轉移与北洋海軍建設——論洋員在洋務運動中的角色与作用」。この後、マッギフィンは威海水師学堂での年俸は2,400兩銀貨である（吳初礼「北洋威海水師学堂」略稿）、包遵彭『中国海軍史』中華叢書編纂委員会出版、台湾、1970年、第799～802頁）。
- (50) この点は、Richard Harding Davis ,Captain Philo Norton McGiffin.Ibid.なお、黃海海戰後、マッギフィンは清政府から受勲を受けた。
- (51) Lee McGiffin , Yankee of the Yalu:Philo Norton McGiffin, American captain in the Chinese Navy (1885-1895) .Ibid. なお、マッギフィンは威海水師学堂の「洋教習」のことにについては、（威海堂「試論北洋海軍的教育与訓練」、前掲『北洋海軍研究』第二輯、第177頁）を参照。

- (52) Philo N. McGiffin, *The Battle of the Yalu*, Ibid. なお、北洋軍の砲術については、前掲泰萊 (W.F.Tyler) 「甲午中日海戦見聞記」にも触られている。
- (53) Philo N. McGiffin, *The Battle of the Yalu*, Ibid.
- (54) 木村浩吉 『黄海海戦ニ於ケル松嶋艦内ノ状況』(東京、内田芳兵衛、明治29年)、第7～第22頁。木村浩吉はその後海軍少将に昇進、特に水雷兵器に詳しい(「大札準備委員会設置並委員長以下任命の件(4)」、『公文備考 礼制11卷30大札1件7』、昭和3年10月4日、防衛庁防衛研究所所蔵)。木村浩吉の著書に『海軍水雷術問答』(水交社、明治21年)、『海軍図説』(大日本図書、明治29年)などが挙げられる。また前掲司馬良太郎「日清戦争」、第378頁を参照。
- (55) 川崎三郎の『日清戦史』(全七巻)が「定遠」による発射だという(川崎三郎著『日清戦史』第一巻、博文館、1896年、第58頁)。また日本連合艦隊司令長官の伊藤祐亨も「定遠」だと報告していた。前掲中国近代史資料叢刊『中日戦争』第7冊、第223～230頁)。
- (56) 池仲祐介「海軍実紀」(前掲『清末海軍史料』上冊)、第175頁。
- (57) 前掲『黄海海戦ニ於ケル松嶋艦内ノ状況』。また前掲泰萊 (W.F.Tyler) 「甲午中日海戦見聞記」を参照。
- (58) Lee McGiffin, *Yankee of the Yalu: Philo Norton McGiffin, American captain in the Chinese Navy (1885-1895)*. Ibid.
- (59) 小沢健志編『写真 明治の戦争』、第54—55頁、第118—119頁。
- (60) 李鴻章「寄譯署」(前掲『李鴻章全集』電稿三、第三冊)、第432頁。なお、この問題の詳細については、蘇小東「北洋海軍的魚雷專業培訓及其成效」(前掲『北洋海軍研究』第二輯、第261～282頁)を参照。